

1月24日(日曜日)「砕かれて、勝つ」

【新改訳 2017】

創世記 32・22-32

「ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。……その人は……ヤコブのもものつがいを打った。……その人は言った。『あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。……神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。』」(24-28 節)

ヤコブは母の故郷に行って妻を得るのに何年も働かされました。それは伯父ラバンの策略のためでしたが、ようやく父母のもとに帰る旅に向かいました。兄エサウとの再会を恐れながらも、神のあわれみで、彼は試練の中で神のお取り扱いと恵みを受けました。

この夜明けまでの格闘は、一般に「ヤボク(川)の渡し(またはペヌエル)の経験」として知られており、ヤコブを変える重大なものでした。彼は、心配の中でひとり主に祈りました。しかし、主はすぐ彼の言いなりに答えられず、彼の自我が砕かれ、主に信頼して祝福を求めるようにされたのです。

神さまは時々、その人をいっそう祝福されるために、砕かれる経験を通るようにされます。そのような時、失望、落胆してあきらめてしまうことのないように祈り続けるべきです。

～祈り～

主よ。あなたによって「砕かれる」者にしてください。あなたに取り扱われる時に、そこから逃げずに受け止め、真の祝福にあずかる者となれますようにお助けください。

**【学びのために】**

私たちは神の祝福を祈り求めながら、自我が砕かれることを望みません。そのため霊的な深みに入れないことが多いのではないかと、自己吟味してみましよう。